平成11年12月24日第三種郵便物認可（毎年1.3.6.9月の1日発行）平成31年1月1日発行　第147号

一仏両祖の教えを今に伝える

曹洞禅グラフ

SŌTŌZEN GRAPHICS

2019 冬号 No.147

駒澤大学 長谷部八朗学長インタビュー

仏教の精神を学んだ人材を世界に輩出することが駒澤大学の使命です

［司会］藤木隆宣

平成三十一年 迎春

喜心

總持辰三叟

平成三十一年（二〇一九）の新春を迎え、謹んで皆様のご多祥をお祈りいたします。

本年は、大本山總持寺独住第四世　中興石川素童禅師様の百回御遠忌奉修の年にあたります。

大火災後の能登總持寺の伽藍復興、能登から横浜鶴見への本山移転、移転後の伽藍建築等の大事業は、石川禅師様の不惜身命のご尽力があってこそ、はじめて成し遂げられたことであります。

禅師様は、法系の上で私の三代前の師僧でもあり、本年御遠忌をお勤めさせていただくことの喜びを、心奥より感じております。

そのような思いから、年頭に際し「喜心」と示しました。私たちが保持すべき三心（喜心、老心、大心）の中で、最初に挙げられるのが「喜心」です。

人間として生まれてきたことを喜び、新しい年をお迎えできたことを喜び、そして仏様のみ教えに出逢えたことを喜びます。

その喜びが、自分だけではなく、周りの人々をも次第に明るくしていきます。とても大切なことであると思います。

皆様にとって、本年がすばらしい一年であることを重ねて祈念申し上げます。

喜心（きしん）

曹洞宗管長
大本山總持寺貫首
江川辰三（えがわしんざん）

慈愛

永平諦法

明けましておめでとうございます。

大気さわやかな新年を迎えました。今年こそこの静謐（せいひつ）が続きますよう念じて止みません。

然（さ）りながら無常迅速の世であれば、様々事象が現じるのも世の道理であることも事実です。昨年は豪雨による河川の氾濫や土石流による風水害が発生し数多くの被災者が出ました。また、大阪地震、北海道胆振東部地震によって大地は鳴動し、被災者を生じることになりました。改めて追悼しお見舞いを申し上げます。

近年、地球規模による気候の変動に起因し、従来では考えることの出来なかった自然災害が続発しております。大自然の猛威の前に人間は為す術もなく、立ち尽くしてしまいがちであります。このいのちの危機の時代を乗り越えて進んでいくには、現状を正しく見極める「智慧」と生きとし生けるもののいのちを慈しむ「慈愛」の心が必要であります。事象にあたってはともすれば傍観者的になってしまいがちになりますが、他者の痛みをわが身に引き充てることが仏者のありようでしょう。そこにあるのは、全てのいのちに「慈愛」の心で寄り添うことです。

永平寺御開山道元禅師の御教えに基づき菩薩行の仏道を実践し、無事これ好日好年となることを念頭に祈念いたします。

慈愛（じあい）

大本山永平寺貫首
福山諦法（ふくやまたいほう）

駒澤大学とは機縁がございました

藤木　本日は駒澤大学、長谷部八朗学長にお話を伺うことになりました。実は宗門の檀信徒は、駒澤大学が宗立であることを結構ご存知ないということなのです。確かに今現在は、文系・社会科学系学部に医療系の学部も加えた一大総合大学になっていますけれども、やはり駒澤大学は曹洞宗立だということを、宗門の中にもしっかりと知らせていかなければということで、長谷部学長にもお諮りして、佐々木宏幹先生、正木晃先生も交えてお話を伺うことになりました。

長谷部　確かに、意外なほど認知されていないという状況はございますね。私もそれはさまざまなところで見聞きいたします。

藤木　先生は慶應義塾大学のご卒業と伺っています。

駒澤大学　長谷部八朗学長　インタビュー

仏教の精神を学んだ人材を世界に輩出することが駒澤大学の使命です

司会＝藤木隆宣

長谷部八朗（はせべ　はちろう）
1950年生まれ。慶應義塾大学商学部卒業、駒澤大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。駒澤大学仏教学部教授。2017年4月駒澤大学学長に就任。『祈禱儀礼の世界－カミとホトケの民俗誌－』（名著出版）ほか著書・論文多数。

駒澤大学とはどのようなご縁でいらしたのですか。

長谷部　そうですね、幾つかの機縁がございました。私は実は商学部の出身でございまして、私の周りは九十九％企業に就職していくというような環境でした。周囲にも多少流されながら就職活動を始めたのですが、勉強をもっと続けたいという思いもありました。そしていざ企業に内定が決まってから、このまま就職でいいのかと疑問が湧いてきたのです。

学部時代から本は自分なりによく読んでおりまして、しかも人文科学系の書籍が圧倒的に多かったんです。その中でふと出会った書物がありました。それが、当時駒澤大学で教授をされていた古野清人先生のご本だったわけです。私にとっては、書物を通じての素朴な出会いが、実は大きな意味を持っていたのです。

そこから古野先生のさまざまな人類学系、宗教学系など、多くのご著書を拝読する中で、宗教への関心が、非常に大きく膨らんでいったということがあります。それまでは、少なくとも、学問の対象にしようとは思わなかった宗教を勉強してみたいと思えたのは、この古野先生のご著書との出会いがあったからです。

藤木　ご本との出会いから、駒澤大学とのご縁が繋がっていったのですね。

大学院受験と佐々木宏幹先生との出会い

長谷部　慶應義塾時代は、宗教社会学者の宮家準先生のゼミを聴講しまして、そこで、いわゆるスピリット・ポゼッション、「憑きもの信仰」について発表する機会をいただきました。これは古野先生も関係の書物をお書きになっておられましたので、大いに読ませていただきました。発表など未経験の人間が初めてやるわけですから、発表の形態を成していないのでありますが、ともかくチャンスをいただいたということが、私にとっては大きな動機付けになったと思います。勉強すること、そしてそれを伝えることの面白さみたいなものを初めて経験させていただきました。

それから、古野先生に付きたいと思い始めたんですね。ともかくも先生にお願いをして、指導教授になっていただけたらという一心で駒澤の大学院を受験いたしました。

私が受験した頃に、駒澤大学には古野先生と、農村社会学では、これまた日本の権威である喜多野清一先生の両巨匠がおられました。修士課程の入学試験では、両先生に面接を受けまして、

お二人がお話をされながら、「スピリット・ポゼッションだったら佐々木君だね」と。そして古野先生から「佐々木君に話をしておく」とおっしゃっていただいたのです。

佐々木　当時私は、ずっと「シャーマニズム」をやっていました。一つには、私は宮城県の気仙沼の出身ですから、あそこにはイタコがおりました。いわゆるシャーマンですね。「口寄せ」と言って、シャーマンとのセアンス（降霊会）があるわけです。神がかりをして、主に亡き人を呼びだして、生前のいろいろなことを遺族の前でしゃべるんですよ。あのときは楽しかった、このときは悲しかったと。

小さいころはそこへ行って、友だちと一緒にいつも覗いていた。それが最初の出会いなんです。それで、神がかるというのは一体何だろうと、それが根っこにあって、それはシャーマンと言われる世界的に宗教の最もベースにある宗教者なんだというのが分かりましてね。それで、シャーマニズムの研究に取り付かれてから、東南アジアを方々調査しました。自分の著書も、学位論文もそれをテーマに出しました。

藤木　そうでしたか。

長谷部　ありがたく合格させていただいてから、早速、佐々木先生の授業を取らせていただいたのが、佐々木先生との出会いだったのです。古野先生からそういうご指示、あるいはご示唆を頂いて、佐々木先生との今日まで続くご縁のきっかけをいただきました。私にとっては、この上なく幸せなことだったと思っております。

駒澤大学　駒沢キャンパス　開校130周年記念棟「種月館」

伝統と刷新が車の両輪になるのです

藤木　学長となられた今、そのお立場から駒澤大学の特長と大学の役割というものを、ぜひお聞かせいただければと思います。

長谷部　何と言いましても、駒澤大学は四百二十六年の歴史を刻んでまいりました。学林、学寮時代から数えますと、日本でも最古の部類に入る大学だと思います。学林ですから、当然そこには、仏教というものが淵源にありました。駒澤大学はその建学の理念を、仏教の教え、そして禅の精神に求め、今後もずっと根底に置かなければいけないと思います。伝統を積み重ね歴史を刻むということは、これは大変意味と価値のあることであります。

一方で、組織運営体としての大学ということを考えたときには、同時に、そして常に刷新力も鍛えていかなければいけない。伝統と刷新というのは車の両輪になります。しかしここが難しいです。つまり、駒澤大学のような大学であれば伝統への依存によってでも、ある程度は維持できるのです。けれども、それでは教育研究機関としての使命は果たせないだろうと考えます。

教育研究機関の一番の使命は、新たな人材の輩出です。そしてその人材は社会に受け入れられなければいけないということになります。さらには人材が社会に出たときに、どれだけ社会にとって意味を成すか。そうすると、常に変転する社会にも、大学自身は向き合わなければいけない。そこで、現実の社会が持つニーズ（需要）において受け入れられるサプライ（供給）というものを刷新力として示していかなければいけないということになります。ここのところで旧と新をどういうふうに織り交ぜていくかというところが、われわれにとっての極めて重要な役割と考えております。

長谷部八朗学長

多様な環境から入学する学生たちに向けて

長谷部　一万六千人近い学生が学ぶ総合大学となった現在、寺院あるいは仏教と関わっていない環境で生育した学生はたくさんいます。その学生たちに対しても、駒澤の建学の理念が持つ意味を理解し、自身のものにしていただく役割があるわけです。

そこで、難しい仏教の言葉、禅の言葉を使ったところで、学生全体には、なかなか伝わりません。しかし、「なるほどそうなんだ」と思わせなければいけないのです。一般の学生たちにいかに広め、伝えていくか。そして、血と肉にしていくかが大事になってきます。それがわれわれの目指す人材なわけですから。

理念を現実に照らしてどう教育していくかということになれば、例えば仏教を根底に据えたカリキュラムを構築し、それをいかに学生の人格形成に反映させ、実践力・応用力を備えた人材として世に輩出するかが、私どもの担うべき役割だと思っています。

藤木　学生の教育に仏教の教えを反映させていくのは、とても大きいと思いますね。

長谷部　「応用仏教学」のような形での、カリキュラムそのものの検討も必要です。初年次教育のような段階から、例えば一年生から坐禅も経験していただき、そして「仏教と人間」のようなカリキュラムを授業で行って、仏教とは何ぞや、持つ意味はこういうところにあるんだということを伝えていく。同時に、それを学生たちの中に、生き方の方向性として反映させなければいけないと。ここが大学という最終教育機関の役割だと考えるのです。

藤木　仏教を基軸に据えての人材教育は魅力があります。

長谷部　私は今、「学生ファースト」ということを訴えています。人材を社会に輩出する大学としての使命は、まずこの学生ファーストだということを、全教職員にも伝えようとしています。学生ファーストは、学生をお客さんとしてあつかうということではありません。学生自身が、「主体的」、「自律的」、「自発的」な意識をもった考え方をしていけるように育てていくということです。

　実は仏教というのは、人間の中に一本筋を通す芯、これを育てるという役割を大いに果たし得る宗教だと思っています。それは、人に対して優しくという利他の精神。その利他の精神を実践するためには、しっかりとした自分自身がなければ、絶対にできません。確たる自分というものを確立したときに他が見えてくるわけですから。そして自己と他者、これは対立概念ではない。それを全部包含していく、包み込んでいくような教育が必要になってくると思います。

佐々木宏幹　駒澤大学名誉教授

藤木　これからは仏教を学んだ人間が、一見異なった領域とみなされがちな商業や工業はじめ様々な分野で、仏教の知見を身につけて世界に出て活躍してほしいです。この駒澤大学から可能性溢れる人材が育っていくというのは、とても大切だと思います。

総合大学として様々な分野の教育にも力を入れています

長谷部　現在駒澤大学では、様々な分野の教育にも力を入れています。構内に入られて、新しい種月館の建物はご覧になられましたか。

佐々木　久しぶりにキャンパスを見て驚きました。駒澤大学は変わりましたね。特に今おっしゃった種月館ね。私がいた頃は体育館でした。随分と立派になりました。何階までありますか。

長谷部　全部で九階建てなんですが、まずは地下一階から医療健康科学部が関係しまして、「リニアック」という装置が搬入されたんです。これは恐らく、世界の最先端を行っている放射線治療の機器なんです。放射線治療を実施するためには、リニアック以外に放射線治療を事前にシミュレーションする高機能のコンピュータシステムを必要とします。

　また、放射線の特性をコンピュータに登録するために、放射線計測システムも必要となります。駒澤大学では、メインとなるリニアックだけでなく、これらすべてのシステムを研究用に一気に導入しました。セットで入れますと、おそらく十五億円ぐらいかかるという機器でして、アメリカのバリアン社、ドイツのＰＴＷ社、米国のＳＵＮ ＮＵＣＬＥＡＲ社が無償で入れてくれています。

　その代わり、ここを放射線治療を専門とする技術者を養成するトレーニングセンターにして、いわば産学協働で外部の専門家もここで養成します。そして養成したスタッフをまた送り出すという関係の中でこの機器が今、動き出しているんです。

放射線治療発展に期待の大きいリニアック

　学内の理系・医学系分野の目玉になっていまして、実際に、今お話ししたような形で世界的に注目されてきています。

藤木　大いに期待が持てます。仏教にプラスして駒澤としての注目点が更に増えるといいですね。

長谷部　この機器は、おそらくがん治療にてき面の効果を発揮するであろうと言われています。いわゆる放射線というのは体を通します。患部を放射線の照射によって特定できるわけですが、他の部位にまで当ててしまう。それをこの機器はピンポイントで行います。ですから、必要以外の部分では放射線を遮断して、必要な部分だけ照射を行い、そこの治療を集中して行う。だから、いわゆる副作用などが他の様々なところにまで波及するということがないんですね。これは実用化が近くなってきています。

藤木　医学系の学校がたくさんある中で、どうして駒澤に来たんですか。

長谷部　駒澤の診療放射線技術科学科は、国内

有数のレベルを長い間維持してきた実績がございました。そういう実績の上に立って、白羽の矢が立ちました。もともとは、近くの大きな病院に入る予定があったようです。それを駒澤にということになったんですね。それはこれまで積み重ねてきた実績を評価してくださったということが第一だと思います。

多様性を包み込む「共生社会」の実現をテーマに

長谷部　今、東京オリンピック・パラリンピックまでに五回の予定で、「学長課外特別講座」という講座をしています。

藤木　都知事もいらっしゃったようですね。

長谷部　はい。あのときが第一回目でした。あと四回やります。そうすると五回ですから、五輪になります。これをばらばらではなく、全てリンクさせるんですね。そうすると五輪の輪になる。要するに、一つ一つのテーマは個別だけれども、それを合わせると一つのテーマに集大成していく考え方でやっています。その集成していく大きなテーマとして、「共生社会」ということを掲げています。共に生きていく、そういう社会をつくっていこうということなんです。

昨今、多様性ということが言われるわけですけれども、障がいを持つ方たちも、健常の方も、男性も女性も、職業も、分け隔てなく、様々な人間がそこで一緒に生きる社会。当たり前と言えば当たり前ではありますが、やはり私は原点に戻ったとき、良い人材を輩出する大学の掲げるべき重要なテーマだと思っているのです。それをどう実践するか。ですから、秋におこなう二回目は、障がいを持つ方々を中心にしての集まりを予定しております。もちろんそれは、やらせていただくという視点に持っていきたいのです。それが仏教の教えですから。仏教の「生かしていただいている」との教えを若者にも根付かせたい。その意味でのボランティアと共生社会、これを大きなテーマとして今後やっていきたいです。

藤木　素晴らしいことですね。佐々木先生、これからの駒澤大学に望むことなどございましたらご意見をお聞かせください。

駒澤大学が取り組む禅ブランディング事業では、様々な講演会、シンポジウムを開催

平成30年9月25日に開催された禅ブランディング事業「禅の国際化」講演会

佐々木　ただいまのお話にも、多様性ということが非常に大事になってくるとおっしゃっています。曹洞宗は、あるいは仏教はこれなんだという一つの原理原則は必要だけれども、その原理原則を尊びながらも、一方ではいろいろな行動が可能な、そういう人材を、特に仏教学部には育ててもらいたいと思います。また、学長さんや各教員が学生の前でお話をするときに、多様性の大事さということを話してほしいのです。この多様性の大事さというのは、一神教ではなかなか難しいのですが、仏教では、まさにそこはダイナミックに広げたり縮めたりすることが可能です。大事な点なので、その辺をもう少し教育の中で生かせるような工夫をなさっていただくといいと思います。

長谷部　ありがとうございます。重要なご示唆だと思います。一方で「ダイバーシティ」（多様性）を言いますと、一方で「インクルージョン」（包含・包括）がないと意味を持たなくなります。多様性をいかに包括していくか。包括する概念の枠（仏教）があって多様性が生きてきます。今日私たちがお話しさせていただいたような内容ですね。それを今まとめていただきました。

藤木　本日は貴重なお話をありがとうございました。

右から正木晃先生、佐々木宏幹先生、長谷部八朗学長、仏教企画　藤木

読者プレゼント

長谷部八朗先生の編著『般若院英泉の思想と行動』を1名の方にプレゼントいたします。仏教企画(P.12送り先)まで、お名前・郵便番号・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえハガキでご応募ください。……平成31年2月末必着

曹洞禅グラフ145夏号プレゼント大村智先生の著書『ストックホルムへの廻り道』は次の方が当選されました。

山形県／沖田實様　　福島県／古川英勝様
東京都／大西啓義様　　奈良県／阿川弥香様
和歌山県／松浦啓子様

お便り募集

読者からのお便り　　**内田敏江 様**

毎年恒例の年頭、越前市（福井県・旧武生市）の寺に墓参り。3人の子供を連れ、御先祖様にあいさつ。一番下の子が3歳位から連れて行き、その帰りに私の実家（福井市）の墓参り。毎年続けていたら、子供達は県外の学校に入学後帰省したら、雪の中墓参り。長男が結婚し子が産まれ、毎年お参り。来れないときは「『武生の方、福井の方』に向かって感謝の心で拝みなさいね」と言っています。帰省時、両家の墓参りを3人の子供達も続けてくれ、それぞれの配偶者、子らもお参りしています。我々夫婦は共同出資し自分達の墓を建立しました。子ら、孫らもお参りする習慣が身につき、これで先祖になれるかなと、一人喜んでいます。そう言えば、祖母・父母も、いつも仏壇に手を合わせ、墓参りもつれて行ってくれたなと想い出します。

毎日書道

普門示現
神通力者
当知是人
功徳不少

高橋秀榮

普門示現（ふもんじげん）
神通力者（じんづうりきしゃ）
当知是人（とうちぜにん）
功徳不少（くどくふしょう）

今回のお手本は「観世音菩薩普門品」の中に見える名句です。観音菩薩は人々の能力をおしはかって、それぞれの人にふさわしい救いの手をさしのべるという意味です。観音菩薩の神通力のすばらしさを讃えた一句です。

作品募集

ご家族のみなさまの応募をお待ちしております

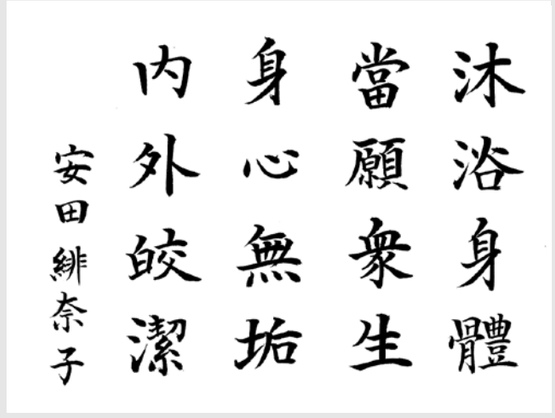
お手本を参考にして、作品を半紙(横向、お名前は左側)に書いてご応募ください。(無料)
ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。
住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。
145号(夏号)～148号(春号)の作品をご応募の方の審査発表は、151号(冬号)にて行います。

送り先 〒252-0113　神奈川県相模原市緑区谷ケ原2-9-5-5
仏教企画　☎042-703-8641

締　切 平成31年2月末

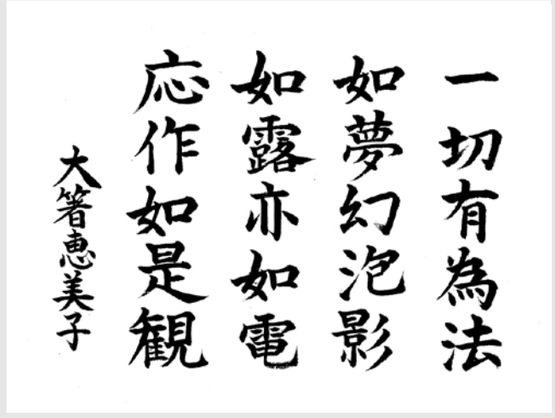
毎日書道 作品審査評

今回も各地から数多くの作品が送られてきました。手本に忠実な書きぶりの作品もたくさん拝見しました。
厳正な審査で選び出した十点の優秀作品に選評を寄せました。なお作品の写真掲載は紙面の都合で二点にさせていただきました。



安田緋奈子さん

全体的に調和がとれた丁寧かつ素直な書きぶりの作品です。



大箸恵美子さん

線が力強く、形もどっしりとした堂々たる書きぶりの作品です。

- ❀ 畠山比呂子さん — 調和のとれた清楚な書きぶりのすてきな作品です。
- ❀ 中山敏昭さん — 文字の大きさ、墨色、文字の配置、申し分のない作品です。
- ❀ 星勝さん — 素直な筆遣いの好感のもてる作品です。
- ❀ 渡邉敬子さん — 撥ね、止めもしっかりした落ち着きのある作品です。
- ❀ 畠山比呂子さん — 手本に忠実な素直な書きぶりの気持ちのいい作品です。
- ❀ 麻生寛子さん — 技巧をこらさぬ、落ち着いた筆づかいのさわやかな作品です。
- ❀ 齋藤完さん — 文字の筆運びが素直で、清楚な感じがする作品です。
- ❀ 東安夫さん — 一文字一文字の筆運びに躍動感があるすてきな作品です。
- ❀ 海老岡道子さん — 縦横斜の線に揺らぎがない、きりっとした素適な作品です。

仏遺教経解説 11

丸山劫外

仏遺教経（仏垂般涅槃略説教誡経）
——姚秦三蔵法師　鳩摩羅什 訳

原文訓読

汝等比丘、諸の功徳に於いて、常に当に一心に諸の放逸を捨つること、怨賊を離るるが如くすべし。大悲世尊所説の利益は、皆すでに究竟す。汝等、但だ当に勤めてこれを行ずべし。若しは山間、若しは空澤の中に於ても、若しは樹下閑処静室に在っても、所受の法を念じて忘失せしむること勿れ。

訳

修行者たちよ、諸々の功徳を積むにあたって、怠け心を捨て去ることは、憎むべき賊から離れるのと同じように、いつも本当に一心にしなさい。釈尊がお説きの、利益のある教えは、すでに説き尽くされた。修行者たちよ、ただこの教えを怠りなく修行するだけである。山中にあっても、静かな沢にいても、樹下や、静かな場所、静かな部屋にあっても、教えられたところの法を胸におさめて忘れる事のないようにしなさい。

解説

今生の過ぎざるあいだに

今まで、少欲・知足・寂静・精進・不忘念・禅定・智慧・不戯論、これらの八つの徳目を学んできました。これらの教えを実践修行するにあたって、大事なことは怠け心に気をつけなくてはならない、ということです。本当に怠け心ほど困ったものはありませんね。他人事ではなく、我が事として受け取らざるを得ません。

本当に、そこまでお迎えが近づいていることの実感を持つことは、至難のことです。

私は、檀家さんのご葬儀を勤めさせてもらう度に、お骨になってしまったその人を思い、自分の事と置き換えることが度々あります。

でも参列の皆さんの多くは、なかなか我が身と置き換えて考えることは難しいようです。読者の皆様はいかがでしょうか。命が永遠に続くとは思っていないでしょうが、この世の命が終わる時が来る、という実感をもし持つことができたなら、それは幸せというものです。道元禅師様のお歌の中に、「いたづらに過ごす月日はをけれど　道をもとむるときぞすくなき」という一首があります。人生は短い、「今生の未だ過ぎざる際だに急ぎて発願すべし」と『修証義』にもあります。出家しなくてもよいですけれど、仏道に学び、仏道に導かれる日々をお送りくださることをおすすめいたします。

親鸞聖人が九歳で出家なさる時に、なにも急いで今日出家しないでも明日でもよいではないか、と言って、上人の出家を止めようとする人がいたそうです。それに対して「明日ありと思う心の仇桜、夜半に嵐の吹かぬものかは」と、この一首を詠まれた、と言われています。台風やら地震やら自然災害も突然に襲ってきます。明日はどうなるか本当にわからない私たちの命です。

原文訓読

常に当に自ら勉め精進して之を修すべし。為すこと無うして空しく死せば、後に悔いあることを致さん。我れは良医の病を知って薬を説くが如し。服すと服せざるとは医の咎に非ず。又た善く導くものの人を善道に導くが如し。これを聞いて行かざるは導くものの過に非ず。

大本山總持寺

訳

ぜひとも常に精進して、法を実践しなさい。為すべき事をしないで死んだならば、必ず後悔することになるだろう。私の教えは、優れた医者が病気に効く薬を処方するのと同じである。だが、それを服用するか、服用しないかは、医者の過ちではない。また、人を善道に導こうとする人がいて、言うことを聞かないで善道に行かないとしても、導く人の過ちではないのである。

解説

人生に為すべき事は

「後悔」とは、文字の如く、後で悔いることです。そうして「後悔先に立たず」とも言います。しかし、生きている間ならばやり直すことはできます。死んでしまったならやり直すことはできません。本当に命の喜ぶことを、今生において為す。それは何か。

勿論、仏教を学び、修行することです。その上で、したいことをしたらいかがでしょうか。芸術に生きるもよし、スポーツに情熱を燃やすもよし、仕事に精出すのもよし、学問を深めるのもよし、家事に精を出すのもよし、お笑いに精を出すのもよし、なんでも自分の生活の

まるやま・こうがい
昭和21年群馬県生。早稲田大学卒業。駒澤大学大学院博士課程満期退学。昭和57年得度（浅田大泉老師）。同年立職（浅田泰徳老師）。平成元年嗣法（余語翠巌老師）。現在所沢市吉祥院住職。曹洞宗総合研究センター特別研究員。

根底に、仏道を学び修行することこそ、人生において為すべき事、と言えましょう。

そのように生きることが人生を命を豊かにしてくれることは必定です。でももし、あなたがキリスト教に出会ったならば、イエス様の教えに学び、修行なさることが人生において為すべきことでしょう。

お釈迦様もイエス様も、山に登る道は違っても、命の根本に辿り着く道を説いてくださっています。人間の命のみならず、一切万物の命です。

私もそこに辿り着きたい。

原文訓読

汝等、若し苦等の四諦に於いて疑う所有る者は、疾く之を問うべし。疑いを懐いて決を求めざることを得ること無かれ。その時世尊、是の如く三たび唱えたもうに、人問いたてまつる者無し。ゆえいかんとなれば、衆疑い無きが故に。

時に阿㝹楼駄、衆の心を観察して、而も仏に白して言さく、「世尊、月は熱からしむべく、日は冷やかならしむべくとも、仏の説きたもう四諦は異ならしむべからず。（次号に続く）」

訳

修行者たちよ。もし四諦の教えについて、分からないところがある者は、すぐに尋ねなさい。わからないところがあるのに、釈尊に解決を教えてほしい質問も、し得ないということがあってはならない。その時、釈尊はこのように三度もおっしゃったが、だれも質問をしようとする者はなかった。なぜならば、修行者たちは四諦の教えをよく理解していたからである。

アヌルッダは、修行者たちの心を見抜かれて、釈尊に申し上げた。「世尊、たとえ月を熱くすることができ、太陽を冷ややかにすることができたとしても、釈尊がお説きくださった四諦の教えは、変わることがありません。（次号に続く）」

解説

これこそなすべき修行

四諦（四聖諦）の教えは、仏教の基本的な教えです。しかし、耳に「したい」と聞いても、死体かと思ってしまいますし、字を見ても、仏教の学びが浅い場合、どのような教えかと思いますね。お釈迦様が質問しなさい、とおっしゃったなら、即座に質問するところですね。

さて、四諦とは、苦諦、集諦、滅諦、道諦のことを言います。諦は真理・真実という意味です。

苦諦はこの世は苦であるという真実、集諦は苦の原因は、煩悩や執着であるという真実、滅諦は苦の原因を滅するという真実、道諦はさとりに導く修行方法の真実、これには八正道という具体的な修行方法がさらに説かれています。

これこそ私たちにとって重要な指針です。

八正道の実践、仏教徒は、これを灯りにして生きてさえいけばよいのです。あまりに多くのことが仏の教えとして説かれていますので、実は、私たちは、仏教徒としてどうしたらよいのかわからず、ただ掌を合わせているのではないでしょうか。

灯りは八正道です。正見（正しい見解）・正思（正しい思い）・正語（正しい言葉）・正業（正しい行為）・正命（正しい生活）・正精進（正しい努力）・正念（正道を思い続けること）・正定（正しく身心を調えること・禅定）です。カッコの中に説明を入れましたが、果たしてすぐに意味がお分かりになるでしょうか。もっとも難しいのは、「正しい」という言葉ではないですか。何が「正しい」の基準になるでしょう。

正しいとは、「仏の教えに照らして」「邪念のない」「清浄である」「偏りのない」等々が考えられます。

もう一つの見方を提案します。思いや言葉や行為など「仏様が喜んでくださるか、否か」と自らに問いつつ、実践したらどうでしょう。

さて、アヌルッダについてですが、釈尊の十大弟子の中で「天眼第一」と言われています。実は釈尊の説法中に居眠りをしてしまい、釈尊に叱られます。それをとても恥じたアヌルッダ

大本山永平寺

は、それ以後不眠不休の誓いをたて、常坐不臥の苦行を長年積みました。釈尊は彼の体を心配して、苦行をやめさせようとなさいましたが、彼は聞き入れず、自らの誓いを守り通させてもらったのです。そしてついに失明してしまいました。しかし、眼は見えなくなりましたが、神通の眼が開けて、あらゆるものを見通す能力をつけたと言われています。

アヌルッダは、目は見えませんが、修行者たちの考えはお見通しですから、この経典中、最も美しい文言、と私は思っているのですが、「月は熱からしむべく、日は冷やかならしむべくとも、仏の説きたもう四諦は異ならしむべからず。」と、釈尊に話しかけるのです。最も美しい場面とも言えるでしょう。是非この場面を想像してみてください。そして今までのこの経典の教えを、改めて噛みしめてください。今にも涅槃に入ろうとしている釈尊も、最後の最後まで弟子たちのことを思って語りかけてくださっているのです。それが今の私たちに伝わっているのです。

私たちもまた、真実の命を今生で生ききることを願いましょう。良いお年でありますように。

佐々木宏幹・わが人生を語る　下

仏教は日本人にとって欠かせない教えである

聞き手　藤木隆宣

「生きたい」ということは「命」に対する願い

藤木　本日は日ごろ先生がお考えのことなど、いろいろとお話をうかがうことができればと思ってまいりました。まずは米寿を迎えられた先生ですから、ふだんからお体の健康には気をつけていらっしゃると思いますが、以前お話を伺ったときに、仏教の教えが生きる上での支えになっているとおっしゃっておられました。

佐々木　そうですね。私は朝起きると、まず自分なりの体操をいろいろやっています。

藤木　ストレッチですか。

佐々木　そうです、ストレッチのあとは顔を洗い、髭を剃り、歯を磨いてから、今度はお仏壇にお水をあげ、誰それの命日ですとか仏誕会、涅槃会には、ちょっとした物をお供えします。買ってきた物が多いんですけれどもね。いつもはお水とお線香を必ずあげて、「南無釈迦牟尼仏、南無一切諸仏」から始まって、お唱えする中に両親の戒名を入れまして。そこに写真と位牌がありますから、今日もよろしくと。

　不思議なことなのですが、何か風邪を引いたり不調を感じたときには、写真の母の顔が曇って見える。心配そうな顔なのです。だから、今日も仏壇に、「藤木老師とこれから懇談をやりますから、よろしく」と言ったら、ぼくには写真の母が明るい顔に映るのです。これが悲しげな顔に見えたときは、私は気をつけるようにしている。それは一般の学問をやった、例えば心理学者から見れば、「佐々木さん自身がそう思っているから、そう見えるだけだ」と言うでしょう。心理学としては、それで一定の実証がされるかもしれないけれども、ぼくは決してそうじゃないと思うのです。

　確かに科学的見方は必要です。しかし、もっと非合理な、これは不合理ではありません。非合理なものの見方というのが宗教者には大切です。合理性を盾にして押してくる社会に対して、合理を越えた非合理なるものが人間の支えになっているという考えが基礎に据えられている。つまり宗教者は普通の科学者とは違うわけですね。では人間の支えになる非合理なるものとはなにかと申しますと、それがご先祖であり、あるいはお釈迦様は今でも生きていらっしゃるということなのです。あるいは、阿弥陀様も観音様も生きて、自分たちを支えてくれている、これを仏教者は強調しなければいけません。

　もちろん、どれほどに生きよう生きようとしても、そこは限界がありますから、駄目なときは駄目なんですよ。たとえそうであっても仏教者であれば、「あなたは本当によく頑張ったね。お釈迦様が、仏様があなたを引き受けてくださるから、大丈夫だよ、心配ないよ」とお諭しする。仏様とご一緒なのだと。一休宗純禅師のような方でも、最後には弟子に対して一言、「死にとうない」と言ったというのは有名な話です。

　だから、お悟りを開いたから死んでもいいということになるかというと、そんなことはないと思います。生きたいということを、欲と言うのか、あるいは願いと言うのか。私は願いだと思います。これは「命」に対する願いであって、いつ死んでもいいというのは、建前としてはあっても、実際は、「生き抜く」ことが大切だと思っています。

生きることは死ぬための準備

佐々木　私もこのごろ老いを感じているところで、これはまず、記憶がだんだん曖昧になってきました。ふと家の鍵なんかをどこに置いたっけと。すぐ近くにあるのに、あちこち探し回るとか。それから絶えず、何というのか、体が重いんですね。

藤木　なるほど。以前はぱっと立ち上がることができたのに、今は思うにまかせない、と。

佐々木　そうです。動きが鈍くなった気がする。それでも食事は普通にとれています。

藤木　それはいいですね。食事と睡眠を十分にとることが大事だといわれますから。

佐々木　子どもの頃は本当に胃が弱くて、お医者さんによく連れて行かれたものです。駒大時代にも胃散（胃腸薬）なんか持って歩いたりしてね。それが今はそうじゃなくなった。いつでしたか、宗教学者の山折哲雄先生と対談したときに、あの先生も胃が弱い方で、胃を二回切っているそうです。病院にも見舞ったことがありますけれども、「もう駄目だよ」とおっしゃるから、

佐々木宏幹（ささき・こうかん）■1930年、宮城県生まれ。東京都立大学（現、首都大学東京）大学院修了。駒澤大学名誉教授。
『人間と宗教のあいだ』（南斗書房）、『シャーマニズム』（中公新書）、『聖と呪力の人類学』（講談社学術文庫）など著書多数。

社会を円滑にするためには、
私は社会によって生かされているということを忘れない。

教的判断ですね。

佐々木　おっしゃるとおりです。生まれたら必ず病になって、いずれのときにか死に至ります。生老病死です。「四苦八苦」の四苦ですね。そうすると、お釈迦様の悟りの中にも、広い意味でそれは入るのでしょうが、生まれたら必ず年老いる、生老です。老いたらば病気になりやすい、やがては死ぬ。だから、病死と言いますね。道元禅師に「生死憐れむべし　雲の変更　迷途覚路　夢中に（を）行く」とあります。まだ永平寺へ行く前の有名なお言葉ですが、本当に生死は、一般人からみたら憐れむべし、雲がどんどん変わっていくのと同じだというわけです。

　そういう生死というものを、最後は神様に委ねれば神様が全部引き受けてくれるというのが、イエス・キリストが説いたことです。ところが、お釈迦様はそうは説かなかった。生まれたら死ぬのは当たり前で、年老いるのも当たり前、これを「無常」といいますね。常がないのだから、瞬間、瞬間で違うのです。昨日の私と今日の私は違っている。お釈迦様の悟りということは、そこにあったわけですね。生まれておめでとうと言ったら、裏の意味は、いつか死にますよということ。つまり、生きるということは、死ぬための準備をしているようなものだということです。

草木国土悉皆成仏こそ日本仏教

藤木　その辺が少しでも人々の内面に入っていくことによって、人間の生き方がまたちょっと変わってくるかもしれませんね。

佐々木　昔、和辻哲郎（日本の哲学者・倫理学者）が、人間というのは「ジンカン」だと説いたんです。「人の間」。だから、一人では生きられないということを意味するので、倫理道徳というものは、ジンカンを滑らかに展開させるためにあると。これは和辻倫理学の根拠ですよね。人間は人と人との間にあって、個人では生きられないというところを最初から考えるべきだと言います。つまり、今でいうと社会あっての個人であり、じゃあ個人は何だというと、社会をつくるための基本単位であると。相互関係の認識が欠けるとやっぱり駄目なのです。

　社会を円滑にするためには、私は社会によって生かされているということを忘れない。俺が俺がというエゴが働いてはいけません。

　さらに仏教者は、先祖代々、もちろんほかの家のご先祖様も含めて、みんなが無数の仏様となって仏国土におられるわけだから、その仏様の国から私たちを見守ってくださっていると考えて、感謝して生きるということです。ここがキリスト教と違うところなのです。キリスト教は一神教で、ご先祖様の概念はありません。とにかく神様のもとに行けば全部救ってくれるという考えですから、日本仏教とは大きな違いがある。

藤木　なるほど、そうだと思いますね。

佐々木　インド仏教では、先祖というのはあまり説かなかったと思いますが、日本仏教はご先祖を大切にします。それはかなり古い時代から「先祖代々」というような意識があって、これはなぜかというと、日本人は絶対の神を持たなかったからということです。

　ご存知のように、日本仏教は草木国土悉皆成仏です。人間だけじゃなくて、草も木も、国土までも全てが成仏する。「いのち」をダイナミックに捉えた、これこそは日本で展開した大乗仏教の一番大きな特長ではないでしょうか。私はそう思っているんです。

完

子どもへの〈素朴なまなざし〉を想う

増山均
早稲田大学名誉教授

挿絵／長谷川葉月

ましやま・ひとし
教育学・社会福祉学者。1948年栃木県生まれ。日本福祉大学社会福祉学部教授、早稲田大学文学学術院教授を経て、早稲田大学名誉教授。『アニマシオンと日本の子育て・教育・文化』『子育て支援のフィロソフィア』など多数の著書がある。

親父の少年時代は

子どもの騒ぎ声が「デシベル」という数値で測られ、騒音かどうかを判定される時代となったことを前回紹介したが、子どもが育つ地域の風景、大人の〈まなざし〉は大きく変わった。たしかに、一昔前の地域の風景とはあまりに対照的である。遠藤ケイは『親父の少年時代』（かや書房、一九八一年）の中で、自らの少年時代（一九五〇年代）を克明にたどりながら次のように記している。「家からあふれ出したこどもたちは、狭い路地にたむろし、ベーゴマやビーダマ、パッチ（メンコ）からゴロベースなどの野球までやり、路地にはいつも元気な歓声が響いていた。『赤ん坊が寝つかねぇから静かに遊べや』ときには、窓からどなられることはあっても、路地から締め出しをくらうことはなかった」と。大人たちが地域の子どもたちに注ぐ〈まなざし〉は、たとえ悪ガキに対しても寛容だったのである。

「日本は子どもの天国」だった？

さらにそれより一五〇年前、時代を明治の初年までさかのぼると、「日本は子どもの天国」だと外国人が驚くほどの国だったのである。エドワード・モースは、その日記に書いている。「いろいろな事柄の中で、外国人が異口同音に指摘することが一つある。それは日本が子供たちの天国（パラダイス）だということだ。日本の子供たちは親切に扱われるだけでなく、他のどの国の子供たちよりも多くの自由をもち、それを濫用することなく、より多くのさまざまな喜ばしい体験をもっている。罰もなく、咎めもなく、叱られることもなくガミガミ小言をいわれることもない。日本の子供が受ける寵愛と特典を考えると、確かに彼らは甘やかされて駄目になってしまいそうに思えるが、とんでもない。日本の子供ほど両親を敬愛し、老人を尊敬するものは世界中どこを探してもいない。汝の父と母を敬え―これは日本人に深くしみこんだ特性である」（明治一〇年六月下旬）

少々褒めすぎの感もしますが、モースだけではなく、フランス人のジャン・クラッセ、オランダ人のフィッセル、さらには日本に定住したラフカディオ・ハーン（小泉八雲）など幕末から明治初年に来日した何人もの外国人が、共通に日本人の子育てと子どもに注ぐ〈まなざし〉を評価していたのである。

素朴な子育てのまなざしを想う

時あたかも明治維新から一五〇年、日本の近代化は日本人の子育ての〈まなざし〉に何をもたらしたのか？　教育制度が確立し、医療や保健や児童福祉制度も整い、子どもに与える豊かな文化が準備されてきた歩みは、乳幼児や子どもの死亡を少なくし「安全・安心」の子育て環境を整える上で大きな進歩といえるのだろうが、子どもに注ぐ〈まなざし〉は果たして豊かになって来たのだろうか。子どもを人材として期待し、子どもを教育して、少しでも「良く」・「正しく」育てようとする意識などなく、大人たちと子どもたちが地域社会の中でともに暮らし、「地域の子」として皆で見守り育てていた時代の、子どもたちへの〈素朴なまなざし〉の価値を想いおこしてみることも無駄ではないように思う。

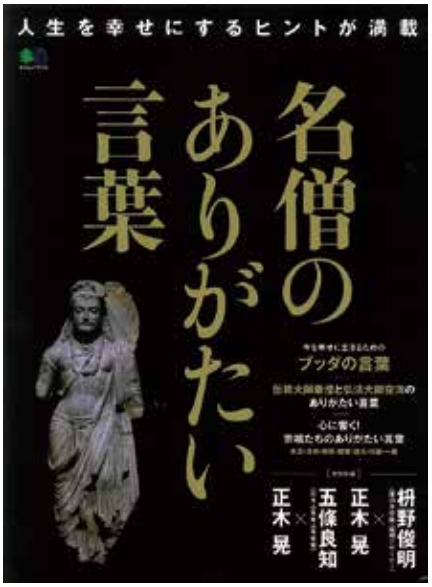
147号　目次

喜心　曹洞宗管長　大本山總持寺貫首　江川辰三　2
慈愛　大本山永平寺貫首　福山諦法　3
駒澤大学長谷部八朗学長インタビュー　長谷部八朗　4
毎日書道　高橋秀榮　12
作品審査　高橋秀榮　13
仏遺教経解説11　丸山劫外　14
佐々木宏幹インタビュー・第2回　佐々木宏幹　18
子どもへの〈素朴なまなざし〉を想う　増山　均　22

表紙画／平川恒太

季刊「曹洞禅グラフ」二〇一九年冬号（通巻一四七号）平成三十一年一月一日発行（第三種郵便物認可）　発行人＝藤木隆宣
発行所＝㈲仏教企画　〒二五一-〇一三　相模原市緑区谷ケ原二-九-五-五　電話〇四二-七〇三-八六四一
http://www.bukkyo-kikaku.com　デザイン＝Maipu Design　印刷所＝恒信印刷　定価一〇〇円

名僧のありがたい言葉



㈲出版社刊
定価：本体1200円＋税（最寄りの書店にて直接おもとめください）